

第18回 国際エチオピア学会学術大会

大場千景
ウォルバート・スミット

■ はじめに

第18回国際エチオピア学会学術大会が2012年10月29日から11月3日にかけて、エチオピア東部のディレ・ダワで開催された。ディレ・ダワはジブチと鉄道で結ばれることで形成されたエチオピア第二の人口を誇る商業都市である。今大会は、ディレ・ダワ大学とディレ・ダワ市の協力のもと、フランスのエチオピア研究の拠点、Centre français des études éthiopiennes (以下、フランス・エチオピア研究所)とアディス・アベバ大学エチオピア研究所(以下、IES)の共催で開催された。主催国がフランスであったため、当初フランスでの開催が期待されたが、本大会にとって初めての試みとなるエチオピアの地方都市開催となった。共催者によると、ディレ・ダワが開催地として選択された理由は以下の4点である。1つ目はフランスで開催するための資金が不足していた点、2つ目は、アディス・アベバに拠点をおくフランス・エチオピア研究所が開催の主体となったため、エチオピアで開催する利便性が高かった点、3つ目は、アディス・アベバ以外の、新しい学問的ランドスケープの探求を目指した点、そして最後に、ディレ・ダワがフランスと歴史的関係の深い町であるという4点であった。

大会には、エチオピア、フランス、ドイツ、イタリア、日本、アメリカ、ノルウェー、スウェーデン、ポーランド、イスラエル、ロシア、オランダ、ベルギー、カナダ、デンマーク、フィンランド、ジブチ(順不同)の17カ国からおよそ300名が参加した。日本ナイル・エチオピア学会の会員では、伊藤義将(京都大学、以下、京大)、乾秀行(山口



写真1 パネルセッションの様子。
Boundary panel by Aramis

大学)、大場千景(国立民族学博物館)、岡崎瑠美(フランス国立科学研究センター)、金子守恵(京大)、川瀬慈(国立民族学博物館)、児玉由佳(アジア経済研究所)、重田真義(京大)、西真如(京大)、久田信一郎(京大)、吉田早悠里(大阪府立大学、日本学術振興会特別研究員)(以上、50音順・敬称略)の11名が研究報告を行った。

主にヨーロッパ出身の研究者で占められていた過去の大会と比較すると、エチオピア人研究者の大会参加は著しく増加しており、ハンブルク(15回大会)、トロンハイム(16回大会)、アディス・アベバ(17回大会)で見られた以上のエチオピア人研究者の参加が確認された。

■ パネルセッションと全体セッション

1. パネルセッション (写真1)

今大会では、考古学・自然人類学(4パネル)、歴史・文献学(8パネル)、宗教学(4パネル)、人類学・人類学的方法論に基づく諸研究(10パネル)、開発論・時事問題(10パネル)、言語学・社会言語学(5

パネル)、美術・文化遺産(3パネル)の7つの研究分野に及ぶ、合計44のパネルが開催され、およそ300に及ぶ研究報告が行われた。それらすべてについて言及することはできないが、いくつかについてコメントしたい。

考古学の分野では、近年のティグライ州におけるアクスム王国期以前の遺跡の発掘とその成果について焦点をあてたパネルが開催された。このパネルでは、ドイツ人を中心とした考古学者グループがもたらした新発見に基づいて、2つの新しい視点が提示された。1つは、アクスム王国を形成した文化的背景には、南アラビアの文化だけではなく、土着の文化の影響も強くみられる点、もう1つは南アラビアの文化と土着の文化の要素が混合して、エチオピア・サバ混合文化が形成されたという点である。これまでアクスム王国の形成についてはサバ支配説が有力であったが、これらの視点は南アラビアの文化とローカルな政治システムの相互作用により、アクスム王国が形成される土壌が生み出されたとする説をより有力なものとするものだった。

歴史学の分野では、新しい視点やアプローチからの発表が多くなされた。例えば、エチオピアとオスマン帝国との関係史に注目し、ムスリム世界とエチオピアの歴史的關係を明らかにすることを試みた報告や、エジプトとエチオピアの関係史に注目し、エチオピア社会は古代から現代にかけてエジプトから極めて強い影響を受けてきたという視座をうちだした報告などである。国境の形成に注目したパネルも開催された。しかし、残念なことに、このパネルにおいてはその視点の重要性とは対照的に、エチオピア人研究者の個人的な政治的関心が前面に押し出され、生産的な議論は行われなかった。そうしたなか、アフリカの角における地図の歴史に焦点をあてたパネルは興味深かった。これまで少数ながらも歴史学者たちによってその重要性が指摘されてきた極めて重要なテーマが、一つのパネルとして取り上げられた意味は大きい。地図の変遷を分析することで、個々のエスノ・ポリティカル・グループ自体が定義するローカルなテリトリー意識の変遷を浮き彫りにすることが可能となり、歴史学にとどまらず、人類学を含めたあらゆる分野に重要な視点を投げかけるこ

とになるだろう。

宗教学の分野においても新しいアプローチがみられた。従来までのエチオピア正教に関する研究に代わって、イスラーム、ペンテコスタリズムや福音主義派などのプロテスタント系の新しい宗教を扱った研究報告が多くなされた。なかでも、改宗のメカニズムとその歴史を明らかにしようとしたパネルは興味深かった。従来のエチオピアにおける宗教研究では、エチオピアの信仰は保守的で安定的なものであると捉えられてきた。しかし、各地域の状況を詳細に見ると、ある地域では数世紀にわたって何度も改宗が行われていた事実や、ある地域では高い安定性が保たれていた事実などが明らかとなり、宗教的ランドスケープはこれまで考えられてきた以上に動的なものとして捉えるべきであるという視点がうちだされた。ペンテコスタリズムに関するパネルでは、中央高地の都市部と南部エチオピアに見られるペンテコスタリズムの広まりが報告された。プロテスタント系宗教はこれまで宗教学者の中で「外来宗教」として等閑視され、深く研究されてこなかった。しかし、今後、さらに研究が深まることで宗教学において新しい視点が生み出されていくことが期待される。

人類学・人類学的方法論に基づく諸研究の分野では、口頭伝承に焦点をあてたパネルが初めて登場した。人類学では口頭伝承の重要性が指摘されてきたが、エチオピアをフィールドとする人類学者の多くは口頭伝承を主たる研究テーマとして取り上げてこなかった。また、歴史人類学者が主体となったパネルの中で、これまで口頭伝承を等閑視してきた文献学者らが報告をおこなっていたことも興味深かった。このパネルでは歴史認識に関する理論的考察や文字を用いずに伝承を記憶する技法を取り扱った報告、口頭伝承と教会文書との比較分析を通して、教会文書に内在する口頭伝承の影響を見ていこうとする文献学者の新しい研究の紹介が行われた。

これまであまり着目されてこなかった、エチオピア社会と世界との動的な関係に焦点をあてたディアスポラ・コミュニティに関するパネルも開催された。北東アフリカからインドに移住し、数世紀を経てインドで王になったディアスポラ一族に関する報告や、エチオピア内部のラスタファリア

ン・コミュニティに関する事例報告は興味深かった。

大会史上2度目となる映像人類学のパネルでは、精霊憑依、儀礼といった、時に言語表現を超えてしまう事象を記録したり、描写したりする際の映像の有効性があらためて確認された。精霊憑依は世界各地で確認されているため、映像を用いた比較研究が今後期待される。また、これまで知られてこなかった20世紀初頭のエチオピアを記録した歴史映像も公開された。

河川が生み出す社会的ネットワークに関するパネルでは、これまでエスニック・グループの居住空間に境界を与え、文化圏を分割する障壁として考えられてきた河川を、遠く隔たる社会を動的に一つにつなげるネットワーク・ツールとして捉え直し、各地域での事例が提示されながら、エスニック・バウンダリーについて再考する必要性が強調された。

美術・文化遺産の分野では、多くの優れた美術品や文化遺産がエチオピアには存在するにもかかわらず、少数の報告しかなされた点は残念であった。パネルの一つでは、エチオピアの急激な経済成長と開発を背景とした文化遺産の破壊について報告がなされた。

2. 全体セッション

全体セッションでは、(1)エチオピアにおける現代音楽、(2)エチオピアにおける開発、(3)教義からみたエチオピア正教会におけるマイクロホン使用の不正性について、(4)北東アフリカに関する学術雑誌の紹介、(5)アフリカの角地域の未来に向けた政治と経済予測、という5つのテーマについて議論が行われた。

エチオピア人研究者が全体セッションに興味を示す理由の一つは、彼らがエチオピア国内の政治・経済情勢、現政府の政策について、学問的枠組みを借りながら気兼ねなく個人的見解を表明できるからである。歴史学者であるパフル・ザウデによる「エチオピアにおける開発」では、取り上げられた事例や「歴史的事実」の真偽について議論されることはなく、エチオピア人研究者たちによる自由な議論が繰り広げられた。しかし、多角的な視点での議論がなされなかったことは残念である。

歴史人類学者エロワ・フィケとウォルバート・スミットが企画した学術雑誌を紹介するパネルでは、北東アフリカ研究を主に取り扱っている学術雑誌の紹介が行われた。パネルのなかで、それぞれの雑誌を刊行する組織に所属する研究者によって紹介された雑誌は以下の10誌であった。

- (1) *Annales d'Ethiopie* (Centre français des études éthiopiennes)
- (2) *Journal of Ethiopian Studies* (Institute of Ethiopian Studies)
- (3) *Northeast African Studies* (Michigan State University Press)
- (4) *Rassegna di Studi Etiopici* (Istituto per l'Oriente)
- (5) *The Journal of Modern African Studies* (Cambridge University Press)
- (6) *Ityopis, Northeast African Journal of Social Sciences and Humanities* (Mekele University)
- (7) *Ethiopian Review of Cultures* (Capuchin Franciscan Institute of Philosophy and Theology)
- (8) *Aethiopica, International Journal of Ethiopian and Eritrean Studies* (Hamburg University)
- (9) *Pount, Cahiers d'études Corne de l'Afrique-Arabie du Sud* (Les Éthiopiens Associés, Bièvres)
- (10) *Afriques, Débats, méthodes et terrains d'histoire, Revue consacrée aux études sur l'Afrique ancienne*, Centre d'études des mondes africains (オンラインジャーナル)

その他、雑誌を刊行する組織に所属しない研究者が代理で紹介した雑誌は以下の6誌であった。

- (1) *International Journal of Ethiopian Studies* (Tsehail Publishers)
- (2) *Eastern Africa Social Science Research Review* (OSSREA)
- (3) *Nilo-Ethiopian Studies* (日本ナイル・エチオピア学会)
- (4) *Eritrean Studies Review* (The Eritrean Studies Association)
- (5) *Journal of Eritrean Studies* (Asmara)



写真2 書籍販売



写真3 閉会式。国際委員会



写真4 主催者と大会ボランティアの学生

University)

(6) *Journal of Oromo Studies* (Department of Sociology, University of Tennessee)

研究報告以外では、フランス・エチオピア研究所、南オモ・リサーチセンター、エンサイクロペディア・エチオピカ・プロジェクト、マックス・プランク研究所などによる書籍販売が行われた(写真2)。また、一日の終わりには、アリアンセ・フランセーズやホテルなどで、レセプション・ディナーや音楽ライブ、写真家且つ歴史映像研究者であるウーグ・フロンテヌ氏から提供を受けた、20世紀初頭のエチオピアの記録映像鑑賞会が催された。また、最終日には歴史都市ハラルへのエクスカージョンが行われた。

■ 終わりに

エチオピアの地方都市で大規模な学術大会を企画する際、ホテルのキャパシティ、電力供給やその他のインフラストラクチャーの整備状況が大きな懸案事項となる。しかし、小規模な問題は発生したものの、運営側の迅速な対処により大会はスムーズに進行したと言えるだろう。今大会は、今後の地方都市での大会開催に向けて、大きな可能性を示した大会だったのではないだろうか。

プロシーディングスの刊行について、二つの方法が提示されている。今回のパネル構成は、個々のパネルが独立した一つのテーマを追求する集団として構想されていたため、一つの方法は、個々のパネル企画者がパネル内で論文を集めて独自に出版するというものである。もう一つは、フ

ランス・エチオピア研究所の刊行する *Annales d'Ethiopie* と IES が刊行する *Journal of Ethiopian Studies* が共同で増刊号を刊行するという枠組みで、個々人が論文を大会事務局に送り、査読を経て刊行されるという方法である。

閉会式に行われた、国際委員会のビジネス・ミーティングにおいては、学術大会は2年から4年おきにエチオピアとそれ以外の国が交互に開催する点と、3回に1回はアディス・アベバ大学が主催するという慣例を今後も継続していくことが再確認された(写真3)。また、今後エチオピアの地方大学が大会開催に関与していくことについて、(1)今大会で行われたように、エチオピア以外の主催国が地方大学と協力しながら主催する方法、(2)地方大学が合同で主催する方法、(3)地方大学が単独で主催する方法、の3つが提案された。いずれの場合も、大会開催計画書を国際委員会に提出することが強く要請された。最後に次回大会は、2015年にポーランドのワルシャワにて、ワルシャワ大学(代表:ハナ・ルビンコスカ氏)の主催により開催されることが決定された。

この報告書は、今大会実行委員の一人であった歴史人類学者のウォルバート・スミット氏(メケレ大学)からの聞き取りをもとに大場の若干の知見を加えながら作成したものである。

(おおば・ちかげ/メケレ大学)
(ウォルバート・スミット/メケレ大学)

(編集部より) 2014年4月、次回第19回国際エチオピア学会の大会事務局より第一次サーキュラーが公開・頒布されましたので次ページに掲載します。

First circular letter and call for panels

Dear Colleagues,

The Department of African Languages and Cultures at the University of Warsaw has the great pleasure of announcing that the 19th International Conference of Ethiopian Studies will take place in Warsaw from the 24th to 28th August, 2015.

An organizing committee has been formed from scholars who are working in close communication with the International Organizing Committee, the Institute of Ethiopian Studies and the Polish Scientific Board whose members are sharing their experience and offering their advice.

Throughout the long history of the International Conference of Ethiopian Studies, the event has been successful in indicating new trends and directions and at the same time in maintaining the strong tradition of Ethiopian Studies. We hope that the 19th ICES will provide an opportunity to reflect upon the *Orbis Aethiopicus*, its diversity and interconnections in space and time. Through choosing such a motto for the Conference, we want to encourage scholars to combine methodological approaches, seek new connections between disciplines, shed new light on recurring issues, and look for a plurality of voices and perspectives.

You can find more information about the Conference on our website (www.ices19.uw.edu.pl). It will serve as a preferred means of communication with the organizers, for sending in applications, and as the main source of all practical information. We kindly ask anyone interested in the Conference to look to the website for new information on a regular basis.

The structure of the Conference has been inspired by over fifty years of the ICES tradition as well as by recent innovations which proved so effective in Dire Dawa. The papers will be delivered either within the framework of traditionally established panels (anthropology, archaeology, history, linguistics, philology and manuscript studies, politics, social sciences and development studies, religion, film) or more specific panels, the subjects of which we hope will be proposed by the scholarly community. We believe that such a combination of tradition and innovation will prove inclusive, intellectually satisfying, and will serve the main goal of the Conference that is to reflect the current state of Ethiopian studies worldwide.

Call for panels

The organizers would like to encourage scholars and students conducting research in Ethiopian studies to submit proposals for topics to specific panels using the form available at ices19.uw.edu.pl. The deadline for submitting proposals is 31st August 2014. The list of selected panels will be published on the conference website by early November 2014.

We encourage panel hosts to take into consideration the necessity to seek financing for scholars from Ethiopia and the neighbouring countries.

Meanwhile, we kindly ask all the recipients of this e-mail to spread the news about the 19th ICES among anyone who might be interested in coming.

Feel free to contact the organizing committee in case of any additional questions or comments.